

## 16. 夏秋トマト有望品種「りんか 409」の増収を目指した施肥量と着果数

### 1. 背景とねらい

夏秋トマト産地では、夏季の高温・強日射による着果不良や障害果の多発により、品質が低下し、可販果収量が減少しています。その対策として、高温期でも着果が良好で障害果の発生が少ない品種「りんか 409」の導入が進んでいます。そこで、本品種のさらなる増収を図るため、最適な肥培管理および果房あたりの最大着果数を明らかにします。

### 2. 技術の内容

- 1) 「りんか 409」では、施肥量を現行の養水分管理指標（慣行量：総窒素量 20g/株，0～240 mg/日/株）の 1.25 倍にすると総収量および可販果収量が多くなります。しかし、1.5 倍まで高めると可販果収量は多くなりません（図 1）。
- 2) 果房あたりの最大着果数を慣行の 4 果から 5 果に増やした場合、いずれの施肥量でも可販果収量が多くなり、特に 1.25 倍では 15%多くなります（図 1）。
- 3) 施肥量 1.25 倍における収量・外観品質の特徴は以下の通りです。
  - (1) 障害果は、いずれの最大着果数でも慣行施肥量に比べて尻腐果や乱形果の発生が少なくなります（図 2）。
  - (2) 平均 1 果重は、最大着果数を 5 果とした場合が 160gで、慣行の 4 果とした場合の 158gと同程度です。
  - (3) 果房段位別の収穫果数や総収量は、最大着果数を 5 果とした場合、4 果とした場合より変化が大きくなります（図 3）。

### 3. 今後の計画

果房段数別の収穫果実数や可販果収量の変化を小さくし、安定的に可販果収量を多くするための生育ステージ別の最大着果数を検討します。

（栽培技術研究部）

#### 4. 具体的データ

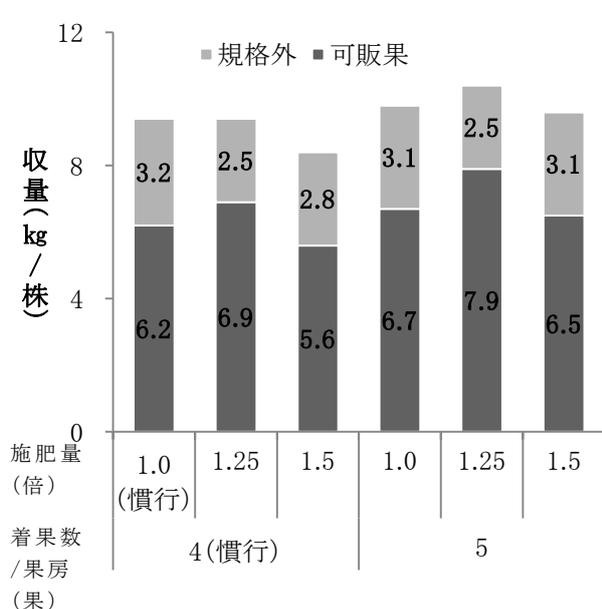


図 1 施肥量および果房あたりの最大着果数が収量に及ぼす影響

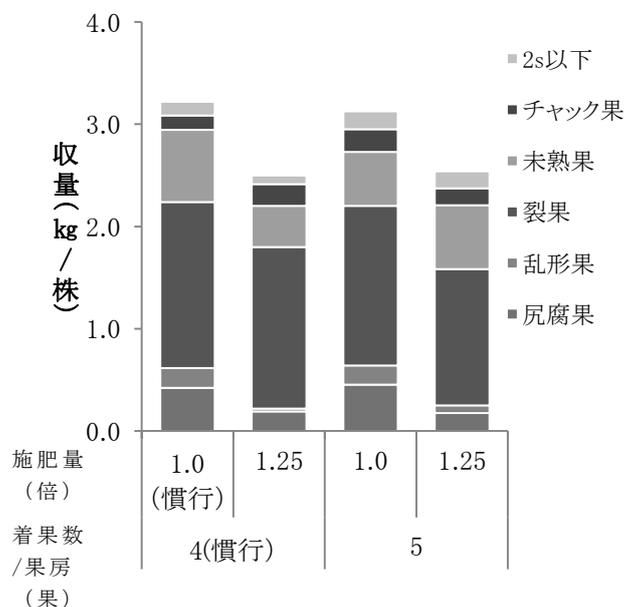


図 2 施肥量および果房あたりの最大着果数が規格外収量に及ぼす影響

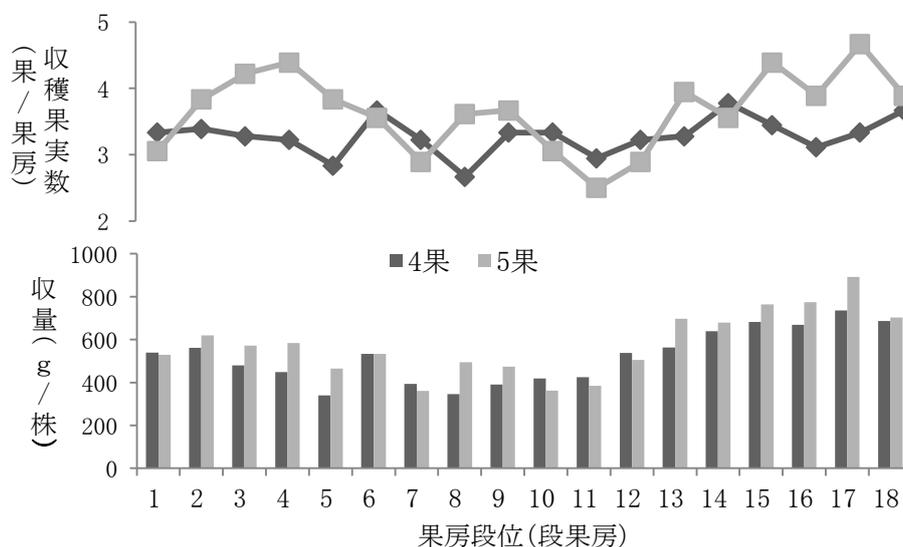


図 3 施肥量 1.25 倍区における果房段位別の収穫果実数および収量